

# 資 料 編

大船鉢装飾品京都市指定有形文化財分リスト	…64
大船鉢遺品類図版	…67
大船鉢の飾付等に関する文献	…79
資料 1 『〔祇園祭礼〕図』（丹緑筆彩本）	
資料 2 『祇園会細記』	
資料 3 『増補祇園御靈会細記』	
資料 4 『祇園山鉢書人』	
資料 5 若原史明『船鉢之記』	
大船鉢の飾付に関する文献の記述対照表	…80
大船鉢を描く絵画リスト	…81
大船鉢を描く絵画図版	…82

## 大船鉢装飾品京都市指定有形民俗文化財分リスト

No.	資料名	数	法量 (mm) 縦×横×高	記銘など	内 容
1	神功皇后神面	1	225×142 (厚5.5 *但し端部分) / 内箱: 273×186 ×117/中箱: 326 ×244×196/外 箱: 429×322× 269	裏面の額部分に墨書あり。しかし削り取られているか。もしくはスレにより判読できず。	白地の上から彩色している。額部分のスレは天冠によるものか、故意に削り取られたものが判然としない。
2	神功皇后頭部	1	190×180×305	(箱蓋裏墨書)「御首 十四日船鉢 当番預」/ (中敷墨書)「開化帝之曾孫 御氣長足姫命 神功皇后 御首綱 四条町」	
3	神功皇后御神体(胴部)	9	170×380×1160 台: 602×855× 120	(箱蓋裏墨書)「神功皇后 御神形」/ (箱蓋表・ 貼紙)「三」/第二十三号 四條町// (箱蓋裏墨書)「明治三庚午歳六月 船鉢町」/ (箱横墨書)「明 治武歳己巳 新調之 船鉢町」	台付/麻製の手袋2つあり。それぞれに「御手袋」「嘉永元年申 六月南四條町 八つ之内」と墨書あり。
4	御二豊台	4	695×945×105		
5	御沓并柳台	2	265×395×240 沓: 270×105× 85	(箱横墨書)「慶應三年丁卯六月 十四日船鉢北 組」/ (箱横・貼紙)「5」「大二十九号 四條 町@」/ (箱横・貼紙)「(壹) の 5 四條町」 「第二十五號 御沓并ニ御臺 四條町有@ 木 村氏」	
6	緋地縮緬腹帶(附 緋 地縮緬包裏)	1	3580×145	(箱蓋表)「神功皇后直隸御腹帶」/ (箱底)「宝 歷十三年 新町組 未六月 北四條町」	紅染の縮緬絹を織幅二折りにして、袋縫いにする。濃色の紅 染ではなかったであろうが、全体に褪色が見られる。使用する 縮緬は、江戸期に多く見られる薄手の二越縮緬である。箱あり。
7	薄地縮緬裂(付・包 裂)	1	480×430	「奉獻天明六年六月吉日 北四條町 田邊宗 兵衛」	緋地縮緬腹帶を包む裂地とされる。薄手の二越縮緬を紅染した 裂で、濃い紅染の色彩が残っている。両織耳があり、裂地の右 下角に奉納年と寄進者の墨書銘を入れる。
8	御神體装束 白地紗綾 形に葡萄文様袱紗(裏・ 白地薄羽二重)	1	560×525	「文化四年丁卯十二月 北四條町 願主 林氏 敬白」	表裏5枚織子組織の綸子織白生地で作られた袱紗。中国製と思 われる広幅織物を用い、裏布に白の薄羽二重を付ける。右下隅に 年紀と寄進者を墨書する。ことあるごとに寄進された御神体 腹帶の一部を、記念して袱紗形として保管するものであろう。
9	白地薄羽二重裂	1	594×474	「安政五年六月 寄附 北四條町」	薄地の白羽二重地でつくる。年紀と寄進者を墨書している。寄 進された御神体腹帶の一部を裂地で保管するものであろう。
10	薄地縮緬裂	1	585×470	「文化四年丁卯十二月 北四條町 森氏敬白」	薄手の二越縮緬を紅染しており、濃い紅染色が現在も残ってい る。両織耳が残り、裂地の左下隅に年紀と寄進者の墨書銘を入 れる。寄進された御神体帯の一部を裂地で保管するものである。
11	御神體御守(箱)	1		(蓋裏)「抑當御神體ハ忝モ日本武尊御子足仲 彦尊也總テ南越角鹿ニ移シテ筒飯ノ宮ト稱ス大 伴武持武内宿祢ニ政事フトラシテ是左右大臣ノ 始也越前一之宮敦賀ニテ大社氣比大明神是也人 皇第十四仲哀天皇ト奉崇 御神面ハ神功皇后右 天皇ノ妃也壽百十二今伏見御香宮ト奉崇 右皇 子應神天皇八壽百十一今男山八幡宮奉崇是三社 ノ御神也最男山ニテ前兩天子ヲ御同社奉崇畢 于時嘉永五年歲在壬子六月御箱収 十四日船鉢 南北兩町」	
12	懸守外袋 鶴鳳凰牡丹 菊文様錦懸守袋	1	330×55		神功皇后御神体が装着する懸守の外装用袋に用いられている錦 織裂。窠紋に鶴の丸、向い鶯の丸、牡丹の花丸の三柄を順次 段文様に表し、縫地に萌葱、黄、縲、白の絵糸を交替させて各 段を織り表している。いわゆる倭錦と呼ばれる古式の織物を表 現しているが、織物自体は古様な縮緬組織ではなく、平組織地 に絞緯で織りだした近世以降の錦織技法を用いている。また別 擲で綴じるなどとくに江戸時代後期の織技を示している。
13	懸守・表面装丁布 雲龍宝尽し文様銀欄懸 守装丁裂	1			懸守本体の金属部に直接外装している錦織裂である。縫に雲龍 宝尽し文様を織りだした銀欄で、全体の図様と共に経三枚地地 捌綻じといった古風な仕様を見せる。しかし、表現がいかにも 部分的で、織技に緻密さを欠くことから、古様を倣った江戸後 期の製作といえる。
14	懸守・内容品 白地羽 二重神功皇后御腹帶	1	2560×340	墨書「奉納 嘉永四年亥六月 神功皇后御腹帶 十四日舟鉢」	白地の絹織平網で作られた薄地羽二重の裂である。細かく畳ま れて懸守の内容品としてあったため、新品のような状態を保つ ている。裂地全体に大きく墨書で奉納の年紀を記す。
15	中啓	1			
16	御神體頭髪	1			絹糸を黒染し、紙で束ねる。糸質および色調から江戸後期から 近代にかけての製作と考えられる。
17	大金幣	1	縦1460	(旧箱蓋表)「十四日船鉢 金幣 南組」/ (旧 箱蓋裏)「文化十歳次癸酉六月」	
18	幣軸	1	810×1022×37	(新箱・蓋表)「幣軸 (御神鏡)」/ (蓋裏)「昭 和四十四年七月調 文化十癸酉年調達の 本箱 損傷激しく新調 為記念箱書箇所保存 四條町 作博物館國宝修理所」/ (旧箱蓋表)「十四 日船鉢 神鏡 南組」/ (旧箱蓋裏)「文化十癸 酉年 六月吉日」	
19	幣串	1	95×120×2325	(旧箱蓋表)「幣串 船鉢町 南組」/ (旧箱蓋 裏)「文化十年癸酉六月」	
20	附属串建	1	85×1055×73		
21	幣串天冠	1	102×125×235		
22	房釣金具	1	径90×200		
23	金具止金	3	長: 245×20×5 短: 70×21×5		
24	飾金具(大)	2	巴文: 径90×43 梅鉢: 径90×40		
25	飾金具(小)	4	巴文: 径45×80 梅鉢: 径45×80		
26	神号軸	1	727×176	「祇園牛頭天王」(裏書)「文化甲戌仲夏吉日 正四位下治部大輔書博士 加茂保孝書@」	

No.	資料名	数	法量 (mm) 縦×横×高	記銘など	内容
27	前掛幕（緋地波濤龍文様綾錦）	1	1310×510		窠紋と巴紋、そして波濤龍文を表した縦長の綾錦の幕。上部に緋羅紗の広い部分を持つた額縫仕立てとし、そこに金糸織で大きくカタ紋と巴紋を横に並べて繡っている。その下に緋地波濤龍文様の綾錦を縫い合わせせる。窠紋と巴紋は厚い肉入繡とし、真新しい様子から近時（昭和四十年の修理時か）の製作と考えられる。また波濤龍文様綾錦はS撚糸諸系を絹糸で用いた曲寸間45枚の綾織で、緯糸にZ撚糸諸系を用いて密に織られ、その経糸の用方からして日本製と判断できる。中国製の綾錦の図様を倣って製作するが、全体の構成や柔かな表現、また個々の文様に日本的な図様が多く見られる。とくに、下部の山岳波濤文様は中国様には見られない日本的な図の表現がされる。金銀糸が密に織り込まれ、図様が細密で色調が鮮明であり、こうした仕様から江戸後期19世紀前半中頃の製作が考えられる、上質な綾錦である。
28	前掛用金具	4	130×60		
29	浅葱色小房	10	360×140		浅葱色の褪色した淡青色の小房である。緋地波濤龍文様綾錦前掛幕の左右辺緋羅紗部を飾る小房。
30	前掛幕（縹地窠文様・白無地縫合）	1	2680×660		上部に紺染木綿裂をつけ、その下方に白木綿を長く縫合した長尺の幕である。紺染木綿の中央に糊防染技法で大きなカタ紋を白く染め抜いている。上辺の2か所に乳を、また左右に各7本の括り紐をつけていて、幕の形態と大きさ、さらに紐付けがあることからして、袖先に掛けた前掛幕と考えられるがどうだろう。また、簡易な仕様から雨用の前掛幕ではないか。裏面に白木綿を用い、修理や改造が見られず、江戸後期から明治初頭にかけての製作と推測できる。
31	後掛幕（緋地龍文様綾錦）	1	1405×910	(蓋表)「綾錦 □□ (墨書二字の上に白紙を貼る) 後懸 四條町」／(蓋裏)「文化四丁卯年 六月 昭和廿九年八月新調」	左右と下辺に緋羅紗を回して仕立てた額縫仕様の緋地龍文様綾錦の幕である。曲寸間45枚の絹糸仕様だが、一枚物としての製作に関わらず中央部分にZ撚糸諸系の絹糸を用いる。類例の極て少ない珍しい例だが、緯糸のZ撚糸諸系の様子や金糸の作成からして間違いない日本製の綾錦だといえる。図様も、上部に額部分を持つ中國壁掛装飾綾織を模倣したものなのだが、本作は上部の額部分を作っていない。龍をはじめ、瑞雲、八宝、山岳波濤文様が中国製より優しく表現され、日本のな雰囲気が表されている。とくに、波濤文様は日本的な青海波の表現がされ、山岳も中国様からかけ離れた和様世界を表現している。色調は全体に明るく彩られ、19世紀初頭の綾錦の色合いがしている。紅染の緋色をはじめ、全体に相当の褪色がすんでいる。裏面に白木綿布を用い、その左辺には細く緋色呉羅服連地を繋ぐ。近年に修理や仕立てしが行われた様子はなく、緋羅紗の一部に僅かだが損傷がみられる。額縫の緋羅紗地に計14個の飾り金具を装着するようになっていて、その取り付け位置など幕の装丁そのものに古様な様式と鷹揚さが感じられる。
32	後掛幕飾り房（黒色小房左右）	18	330×130	(箱蓋表)「明治三年 黒房拾八掛 四條町」／(箱横)後掛 黒總 数枚内／(箱横)「南四條町」／(貼紙)「11」／箱横・貼紙「(參) 7の3 四條町 □号 四條町 @」／箱横・貼紙「第卅弐號 小房十八懸 四條町有@ 三中西氏預ケ」	緋地龍文様綾錦後掛幕の左右辺の緋羅紗地に懸かる小房である。
33	天水引幕・金地雲龍文様錦（左右）	2	575×453		金地に雲龍文様を艶やかに織り表した豪華な錦織。文様部の雲龍と共に地部も縦に金糸を用いて紋織した総文様の織物。5m弱の織丈に龍一頭を瑞雲と共に大きく織りだしている。また、左側と右側の幕を図替りにして織っている。通常の織物の概念から外れて質を尽した織物だといえ、使用する金糸が上質であり、また色糸や金糸の織り込みを全般仕様にして緻密な図様表現がされている。生形を放った鋭い龍の表情が描かれていて、画家の下絵を想起させる。また、織細な縞模様と明るい色調で織り表されるのは、江戸後期文化文政期頃の織物類に共通した表現である。ちなみに、三重県鈴鹿市白子町の白子祭に用いられる同様の織物「麒麟図錦織水引幕」に、文政年の記銘があつて本幕と共通する技術が見られる。
34	一番水引幕（緋羅紗地波濤龍文様刺繡）6点 二番水引幕（窓絵唐草文様綾錦）5点	11	【袖先部】772×617(一番水引のみ) 【右舷前部・左舷前部】 【右舷前部・左舷前部】(全体) : 782×3065, 3417(上部、下部) 【右舷中央部】(全体) : 590×1531, 1472(上部、下部) 【右舷中央部】(全体) : 590×1472, 1427(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 590×1534, 1475(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 186×1475, 1412(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 780×2780, 2765(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 586×2780, 2760(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 198×2760, 2765(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 591×2773(上部) 【左舷中央部】(全体) : 192×2764(下部) 【左舷後尾部】(全体) : 786×2010, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 538×2010, 1852(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 212×1852, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 722×1930, 1790(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 542×1930, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 180×1820, 1790(上部、下部)	【右舷前部・左舷前部】一番水引裏面白木綿布に墨書「神功皇后 御神前鉢 三枚之内 明治四十五年壬子七月修覆之」「四條町」／二番水引裏面白木綿布に墨書「枚之内」 【右舷中央部】裏面白木綿布に墨書「神前鉢用三枚」／明治四十五年壬子七月修復之 御慶賀寄附連名 (いろは順) 池田善三郎 井口幹子 細田惣七 林その子 西野重三郎 岡島卯三郎 小賀市太郎 中川和助 前田令太郎 同棄次郎 松本平兵衛 古賀伴三郎 青山松次郎 澤田半蔵 目片嘉三郎 水野義郎 杉原治助 四條町 【左舷中央部】(全体) : 780×2780, 2765(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 586×2780, 2760(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 198×2760, 2765(上部、下部) 【左舷中央部】(全体) : 591×2773(上部) 【左舷中央部】(全体) : 192×2764(下部) 【左舷後尾部】(全体) : 786×2010, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 538×2010, 1852(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 212×1852, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 722×1930, 1790(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 542×1930, 1820(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 180×1820, 1790(上部、下部) 【左舷後尾部】(全体) : 180×1820, 1790(上部、下部)	舷の欄縫下に懸かる水引幕で、袖先部、右舷前部・左舷前部、左舷中央部、右舷中央部、左舷後尾部、右舷後尾部の6点の幕が保存されているが、もとは右舷前部と左舷前部は別材で、袖先部を挟んで懸けられていたものが、会所飾り用に合わせて仕て直されたものである。各部の幕は共に2枚の製地を上下二段で構成し、下部の二番水引幕の上に上部の一一番水引幕を少し重ね合わせて仕立てている。但し、袖先部の幕のみは二番水引を伴わない。 【緋羅紗地波濤龍文様刺繡】 欄縫下に懸かる6枚の水引幕の上部にあたる一番水引幕である。緋羅紗地に波濤と龍文様を刺繡するもので、大方が直繡技法で作られる。繡技として巻きたて繡、駒たてどり繡、繡切繡、駒刺繡、オランダ返し繡、締め繡、巻き取等みられるが、龍の眉など一部に切付繡を用いていい。金糸を用い、また江戸後期に多くみる金糸と色糸の全糸仕様がなされ、上作の駒刺繡幕といえる。一部に墨描による加彩がされ、龍の目に吹ガラスを用いる。龍と波濤文様が確固とした表現で描かれ、空間を活かした粗密な部分の構成をもつており、文化文政期頃の織物に共通する表現と色遣いがみられ、製作はその頃と考えられる。現在は、金糸の駒止め繡の修復糸、また色糸部の損傷や剥落防止のための大まかな縫り繡が全面に施されている。 【懸絵唐草文様綾錦】 絹糸にS撚糸諸系を用いた、曲寸間45枚の綾織。また、緯糸の織込み密度が曲寸間120本と高密度で、比較的精緻な表現をした綾織である。Z撚糸諸系の緯糸と、金糸の接着材が透漆であることから日本製綾と判断できる。緯糸に紅、朝紅、緑、藍、茶、黄、白の濃淡糸と色糸が多く、また土質な金糸を用いて織密度の高いこと、さらに色糸の色調が鮮明であつて、白色と薄色に加えて明るい金糸を多用するのは、やはり文化文政頃の染織品に見る特徴である。蘇芳染の紫糸と茶染糸の部分が、鉄媒染による鉄錆発生のため質化し、その部分で剥落をきたしている。また、紅色糸の褪色も著しい。6枚の幕のうち、左右後部に懸かる2枚の幕は、下辺を江戸期の天保(堀川)更紗で覆輪仕様しており、それらの諸要素から江戸後期の製作が確認できる。

No.	資料名	数	法量(㎜) 縦×横×高	記銘など	内 容
35	水引幕(黄・緋羅紗縫合)(左・右)	4	【左舷前部】770 ×1650, 1715 (上部, 下部) 【右舷前部】770 ×1650, 1715 (上部, 下部) 【左舷後部】775 ×3360 【右舷後部】775 ×3360		現在は左舷前部、右舷前部、左舷後部、右舷後部の四枚の幕が残る。共に修復の手が入っており、銘記はないが緋と萌葱羅紗縫合の胴幕と共に、昭和45年に修理されたものと考えられる。本水引幕も綾幅を上下に二分割して構成し、上段を幅広の緋羅紗地で、また下段を幅狭の黄羅紗地を用いて縫い合わせている。まさに舷欄縁下の刺繡と綾織の水引幕を見るように、一番水引と二番水引となる仕様を倣っているようだ。前方と後方の2枚の幕を繋ぎるために前方の幕に縫穴を穿ち、後方幕に牛角型の鉤をついている。幕の装填にこのような仕様を利用する例は珍しい。裏布の白木綿は当時の裂地と思われるが修理が入っており、その際に幕を吊るための新しい乳をつけ足している。しかし、何故か上辺だけでなく下辺にもつける。江戸後期から近代初頭に製作された幕と推せるが、水引幕としては舳先部と後方部の2枚の幕を欠いており、枚数が不足する。また、全体が簡易な仕様であることからも、雨用の水引幕として製作、使用されたものと考えられる。
36	額装綾錦製(窓絵唐草文様綾錦)	1	260×780		舷欄縁下水引幕として用いられている二番水引幕の窓絵唐草文様綾錦と同様である。ちなみに、S 段諸糸の経糸が曲寸間に45枚で、緯糸が乙撚諸糸で密度が曲寸間約120本という上質の日本製綾錦である。図柄、色調、織技と共に舷欄縁下水引幕の二番水引幕と全く同様である。
37	艤屋欄縁下水引幕(緋羅紗地鳳凰文様刺繡)(左・右・後)	3	【左舷】620×1210 【右舷】620×1270 【後方】620×1470		緋羅紗地に鳳凰を刺繡した3枚の水引幕である。進行方向に向かって上方および下方に飛翔する鳳凰を左右の幕に、また振り返って舞い降りる正面鳳凰図を後方幕に繡う。刺し繡、折り返し繡、縫い切り繡、纏い繡、相良繡などの繡技を行い、金糸の駒刺し繡、締め繡、巻き立て繡を行う。鳳凰の顔部のみは切付繡をしている。金糸や色糸を多種類に用い、写生的な細かい表現をするものの図様はやや硬い表情がある。刺繡の一部に孔雀糸を使用しているが、国産織物で孔雀糸を利用するものは18世紀後半以降といえる。また鳳凰の目のみならず尾羽根の装飾にガラスを嵌入して繡う例も珍しい。但し、現在の鳳凰の目のガラスは近年の修理時に補填された合成樹脂製である。作風や技法から江戸後期の刺繡幕を考えられる。
38	舵(緋羅紗地波濤龍文様刺繡) 附 舵柄部組紐飾(濃紺七宝文様網房飾)	2	1615×1190×45 附網房飾39×1165	(新箱・蓋表)「舵 猛々金龍縫」／(蓋裏)「昭和四十四年七月調 明治四年調達の木箱損傷激しく 新調為記念箱書簡所保存 四條町 作博物館国宝修理所」／(旧箱部分保存・蓋表)「于時明治四歳六月 猛々緋金龍縫 構 南四條町」	やや変形の台形をした舵板に、左右対称に製作された2枚の緋羅紗地波濤龍文様の刺繡幕を表裏に貼りつけている。幕は緋羅紗地に波濤雲龍文様で直繡して、縫切り繡、刺し繡、巻立繡、スギドリ繡、駒語繡などの技法を用いる。一部、龍にやや厚い肉入れ繡にする。刺繡幕を舵板へ直接に装着するために、龍眼のガラスを他の緋羅紗で切り抜いてその裏面より装填している。紅色にやや褪色が見られるが、全体に色彩および刺繡がよく残されていて良好な状態だと見える。また、龍や瑞雲の刺繡彩色に陰影表現が行われ、近代初頭の刺繡技術がみられる。近代初頭の優れた刺繡作品だが、本作には未だ化学染料が用いられていない。別製の網房飾りを伴っており、それを下辺に垂れて飾る。一部に金糸の外れた損傷箇所が見られる。舵板の下辺両隅に補強金具をつける。
39	胴幕(緋・萌葱羅紗縫合)(左・右)	2		(左舷)裏布墨書)「敷物六枚之内 明治四十五年壬午七月修復之 御慶発起人 岡島卯三郎 (他略・計十七名)」／(右舷)裏布墨書)「敷物六枚之内 四條町 明治四十五年壬午七月 □□□□□□□修復贊成寄附員連名 (いろは順) 池田善三郎 (他略・計十名)」	現在は、左舷部と右舷部の2枚の幕が残る。しかし、裏布の墨書に「六枚之内」とあって枚数が照合しない。また、墨書に「敷物」とあるが、幕の形態や本幕を用いた様子を描いた大船鉢の絵画資料からみても本幕が胴幕だったことに相違なく、通常は羅紗地は敷物として用いられることが多く、羅紗幕を称して敷物と記しているのではないだろうか。たとすれば、前掲の黄と緋の羅紗を縫合した水引幕4枚が残存しており、都合6枚となる。そのように解釈できなくはない。緋羅紗と萌葱羅紗を縫接にして胴幕に立てており、江戸後期の天保5年(1834)から元治元年(1864)の間に描かれたとされる「祇園祭礼図屏風」に、緋羅紗と萌葱羅紗を縫合した胴幕が同じく描かれている。本幕の材質も当時の頃のものと考えられる。昭和45年の修理時に新しい乳をつける。
40	飾り房(黒色大房)	4	810×200		黒色大房の四流と、黒色小房の四流が同箱に収納される。しかし、これらが何處に懸装される房なのかが明瞭でない。黒染に伴う鉄錆発生による贅化が少し見られる。
41	飾り房(黒色小房)	4	600×140		
42	神功皇后御天冠	1	200×400×235	(箱横・貼紙)「第廿壹號 御天冠 四條町有@ 佐々木氏預り」／(壹) 7の1 四條町」「1」	
43	御神酒瓶(中)	2		(箱蓋裏)「文化十四丁丑六月新調 南四条町改四條町」／(箱底部)「寛政式年正月十一日」／(箱横貼紙)「第四十一号ノ壺 四ヶノ内 鍬御神酒瓶中 四條町有@ 吉田氏預り」／(五) 11の8 四條町」「29」	箱あり。一对。
44	御神酒瓶(小)	2	径120×250	(それぞれ本体底部に刻銘)「寄進 井高雅」／(箱蓋)「六月十四日祇園會船鉢 錫神酒德利一對 四條町」／(箱蓋裏)「文化五年六月 寄進井高雅 祀主越後屋與七」／(箱底部)「文化五年戊辰六月」／(箱横貼紙)「第四十一号ノ壺 錫神酒瓶四個 一、二、三、四 大一、中一、小二 箱入 四條町@ 吉田氏」／(五) 11の10 四條町」「30」	箱あり。一对。
45	御神酒瓶(小)	2	径110×250	(それぞれ本体底部に刻銘)「南」／(箱蓋)「六月十四日祇園會船鉢 錫神酒德利一對 南四條町」／(箱底部)「南四條甲」／(箱横)「錫神酒德利」／(箱横貼紙)「第四十號四個ノ内ノ三号 錫神酒瓶小 四條町有@ 吉田氏預り」／(五) 11の10 四條町」「(袋墨書)それぞれに「神功皇后様御神酒德利」	各々麻袋に入り、箱に納められる。一对。
46	鐘	2	径190×50	(刻字)「天保十己亥年 十二挺之内 十四日 鐘鑄町 南條勘三郎作」／(箱蓋表貼紙)「第三十四号之壺 四條町」このうえに貼紙「(六)の16の1四條町」「33」「第三十四号一□□鐘 木村□□」(箱蓋墨書)「凱旋船鉢第□□鐘□□」	箱あり。箱に記名あり。
合計		121			

# 大船鉾遺品類図版

※番号は64頁からの表に対応する。



1 神功皇后神面



42 神功皇后天冠



15 中啓



6・7・8・9 腹帶など



3 神功皇后御神体（胴部）



13 懸守・表面装丁布



12 懸守外袋



17 大金幣



18 幣貯



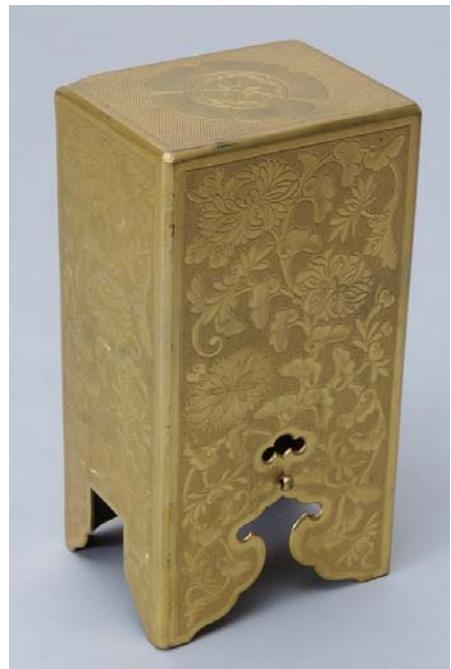
20 附属串建



19 幣串



(19 側面)



21 金串天冠



(21 側面)



(21 上面)



(19 金具正面)



(19 金具側面)



24 飾金具（大）



22 房釣金具



25 飾金具（小）



23 金具止金



37 舳屋形欄縁下水引幕（右・後・左）



33 天水引幕



27 前掛幕



(27 前掛用金具装着時)



28 前掛用金具



29 浅葱色小房（前掛用）



70

31 後掛幕



(31 後掛金具 (1) )



(31 後掛金具 (2) )



32 後掛幕飾り房



34-1 水引（舳先部）



(34-1 裏面)



34-2 水引（右舷前部・左舷前部）



34-3 水引（左舷中央部）



36 額装綴綿裂（二番水引）

34-4 水引  
上・左舷後尾部、下・右舷後尾部



38 舵



(38 舵黒房)



(38 舵黒房金具（中）)



(38 舵金具（底面）)



35 水引幕（雨用水引）



30 前掛幕（雨用前掛）

船鉾創建なりてより實に四百八十年、其趣向に於て  
断然他の山鉾を凌駕し、崇敬の上に於て、又他の山鉾  
を超ゆる事は普く世人の知る所、已に應仁に災し天明  
に災し元治に災す、惜しむべし、裝具を失ひ錦繡を焼  
く、其損害何を以てか是に代へん、然りと雖も幸に神  
面の残るありて、信仰炳として昔日にかはらす、年々  
賽者市を為すは神徳の然らしむる所とは云へ、町家の  
守護の全きに依るところ也、天下弥々祥平に神光いよ  
／＼照りまさる、今後に於て船鉾をして再度復興せら  
れむか、京洛の衆民欣舞して之れを迎へん事を信じ、  
茲に筆を措くもの也、

昭和六年七月 松村氏清囑に依而書之

鹿嶋 人形は新作、立烏帽子、右に長刀左に唐团扇

を持ち、白衣に茶地狩衣、白精好の大口、太

刀、

屋根 二重屋根、唐破風、銅瓦葺、

屋形 組天井、柱六本、浪麒麟の軒彫刻、

龜杏 金地龍模様の織縫、

舳先 金箔置の龍、近年松村月溪の意匠にて作る、

同 大金幣、眞紅の大房付、文化十年六月の新調、

○文化十年より北組當番の時は龍頭、南組當番の時は大金幣を用ふる事定まり、

前掛上 猩々絆、金糸にて窠巴紋縫、

前掛 花色地綴織、眞向きに龍模様、縁猩々絆、浅

黄房付、

水引 猩々絆無地、後に至つて浪に飛龍の縫を施す、

同二番 紺地錦、小雲金入模様、

胴幕 紺地菊唐草模様と猩々絆無地の豎つぎ、幔幕

仕立にて紺糸房付、

高欄 朱塗、浅黄郡内に窠巴紋付の下幕を附す、

欄縁 黒塗、金滅金の金具、

艤屋形 上下に高欄中は瓦燈口 三方とじ張障子、浪

に海馬の彫刻極彩色、上幕紫ちりめん、窠巴

紋、下幕藍天鷲絨、羅紗無地、眞紅の隅房、

見送 鶯色牡丹に鳳凰模様の織物、縁猩々絆、眞紅

の房附、

舵 猩々絆、浪に金糸にて龍模様の織縫、文化新

調、黒輪違結びの裾房付、

下幕 白晒に藍上り浪模様、

吹貫 萌黃ちりめん、紅ちりめん、白ちりめんの三

色、

幟 猩々絆、白寄糸にて窠巴紋縫、

以上、

文化文政の頃に於て、新調全く成りて堂々祭列最後の華として、無為の順行を續け來りしに、

元治の焼亡 元治元年七月十九日、所謂鉄砲焼の京師大火にて再度

焼失するに至り、其罹災の程度の甚大なりし為に全く再び復興の氣運に恵まれず、僅に宵飾りに残存の懸装品を飾り、皇后の神前に奠して諸氏の崇敬にこたえ、

以て今日に及べり、

のうへに萌黄の水干、窠のもようあり、

緋のはかまハ鉈子なり、

（纏） 水引 萌黄羅紗五色の雲ぬい、

は兎と犀、

儀良 合掌のすがた、半臂は黒地金入龍のもよ

う、さしぬき、

弓韁矢、直衣は黒の紗、

鹿嶋 右に長刀、左に唐团扇をもち白小袖を着、

紗のかり衣、

屋形 此内に神功皇后の人形あり、

天井幕 屋形の天上に有、赤地金入、きくのもや

う、

屋形幕 錦もやう菊、両方に花幔あり、

金幣 艘先にあり、

猩々緋桐鳳凰のぬい、

大水引 艘かくしとも云、もへき羅紗、金糸飛龍

の縫、

胴幕 三幅、緋純子、花いろどんす、同色びろ

うど、

雲彩浪のもやう、浅黄上りうんさい、

戻子しやうじ、ほり物三方ニ有、龍東西

（纏） 屋形

天明八年の 燃失

以上

の如き裝飾を以てその壯麗を誇り來りしに、天明八年正月十八日の京洛の大火に罹災して、僅に神功皇

后的御神面を残して、大部分燃失せしは惜しむに餘りありと云ふべし、されど幾莫もなく再建され、寛政の末年より祭儀に列せり、然して其裝飾品に於ては、燃失以前よりも遙に絢爛を増せしもの如く思はる、再建

当時の船鉾の懸装左の如し

文化文政 年間の裝飾

十四日船鉾

皇后 御面は燃失以前のもの、人形は新作にて、四

條の人形師齋藤新十郎の作、萌黄の狩衣、八

つ藤の差貫、沓を召さる、然してこの装束は

去る堂上方よりの寄進に係るものなり、

儀良 人形は新作にして、合掌、花色地金入の半臂、

うこん地、精好の大口を着く、

住吉 人形は新作、白衣に萌黄地狩衣、白精好の大

口、侍鳥帽子を冠り、太刀を佩く、

て、嘉吉元年六月祇園会再興されし際、多くの山鉾が  
皆復興、若しくは創建されしに依る所なり

寄り町

東洞院御池上る  
船屋町

柳馬場御池上る  
虎石町

二条東洞院東入  
松屋町

二条高倉東入  
觀音町

創建の年代  
当町に有する船鉾の創建年代に就ては確なることを知  
り得ざるも、已に八坂神社の社宝にして室町時代の記  
録なる「祇園社記」第十五卷祇園會山ほこの事の條に、  
應仁乱以前の名を掲げて

一、しんくくわう／＼舟 四條（町）と綾小路間

と有れば當船鉾が應仁以前より存在せし事明かにして然も當時より十四日即ち後の祇園會に順行せしもの、蓋し先きに云ふところの嘉吉元年に建立せられし鉾の一ならん

應仁の焼失  
應仁元年の兵燹に罹つて一時焼失せしも、約三十年

の後、明應五年に至り將軍義澄より祇園會再興の御沙汰書下りて、その二、四年の間に復興し、舊の如く毎年順行を経續せしものゝ如し

江戸時代に入りて寄り町を定められ、地之口米の神

宝暦年間の  
装飾

江戸中期に至りて益々華麗を加へ、宝暦の頃を以て

最も盛んなりとす、當時の裝飾左の如し（山鉾由来記  
抜抄）

船鉾 新町四条下ル町

納の制成るに及び、經濟上に於て一の保護を享くる為  
め増々壯麗に向ひたる事、言を俟たず、今當船鉾に属  
せし寄り町を示せば左の如し

神功皇后 面をかけ、かつら、其上に天冠あり、末  
廣をもたせ上着二やうあり、一ト通は地  
黒又一とをりは白ぬめ地、白の縫入、そ

資料4 『祇園山鉾書 人』文政一〇年（一八二七）

〔六角町文書〕

船鉾

新町通四条下ル

北四条町  
南四条町  
一丁二面三丁町二分ル  
故ニ年寄モニ所有ル

天明後文化元  
子年ヨリ出ル  
今十四日ハ愷陣之体委ク七日ニ出ス故爰ニ略ス、

ママ

古ヘハ帆柱有リ今ハ不用、此鉾元ハ東洞院上ル町ニ有ル故

ニ其町ヲ今モ船屋町ト云、

神功皇后面テ掛カヅラノ上ニ天冠未廣  
ヲ持衣装白衣萌黄水干縫ノ袴

鹿嶋右ニ太刀左ニ唐扇ヲ持  
白衣小袖ニ沙の狩衣着

一船頭月渓ノ國スル所ノ金箔地龍ノ頭又一年ハ大幣  
隔年ニ出斯但シ此大幣ハ仙洞御所ヨリ御寄附

儀良合掌之姿半臂黒地金  
入龍ノモヤウ指貫

住吉弓觸矢直  
衣黒ノ紗

高蘭下

一前掛綾龍之図ヘ  
猩々縫波ニ

一上水引猩々縫ト浅黄  
黄色図八唐花ノ紋

後掛同断

一下水引猩々縫波ニ  
飛龍ノ縫

一胴巻猩々縫ト浅黄  
段子ノ段タラ

一櫓上ニ幕ク紫縮緬瓜巴  
之白上リ

一艤隱後掛トモ云綾青海波  
二龍ノ図

一御殿屋根草紫縮緬金  
地ニ龍ノ紋

一棍猩々縫波ニ  
縫波ノ縫

一小旗猩々縫白ノ  
クワ縫紋

一吹五色ノ綱  
頭銀ノ玉

寄町

一東洞院御船屋町柳馬場御  
一池上ル

一柳馬場虎石町二条通東松屋町  
一洞院東松屋町

一两条通觀音町是より北  
丁戸分

一条上ル等持寺之町五斗

一東洞院御笹屋町五計高倉四条  
一池下ル

一高倉四条帶屋町三斗上ル已上  
一上ル

一貝屋町三

斗

資料5 若原史明『船鉾之記』昭和六年（一九三一）

〔四条町大船鉾保存会蔵〕

船鉾之記

官幣大社八坂神社山鉾調査委員

若原史明謹記

抑も祇園会の起原は、遠く一千有餘年の昔、清和天皇の御代貞觀十一年にして、京洛の民が疫病退散を祈る為祇園の神輿を神泉苑に送り長さ二丈程の祭り鉾六十六本を立てゝ祭りしを始めとし、又これを鉾の濫觴となす、爾來年を経るに順つて盛大になり、一条天皇の長保元年、雜藝者の无骨といへる法師が、大嘗会の標の山に倣ひて、作り山を曳き渡せしを山の原流となす、斯くて藤原時代の華奢風流を加へ、鎌倉時代の散樂田樂曲舞等の舞曲を交へ、山鉾相互に短を捨て長を取り、或は融合或は合流或は獨立して、略々南北朝頃に至りて今日の山鉾の姿を大成せしものにして、室町時代の盛時にあつては鉾の数十四、山の数四十九基の多きに及べり、是れ足利六代將軍義教の台命に依つ

## 寄町

東洞院 船屋町、二条東洞、柳馬場御  
御池上 虎石町、院東へ入 松屋町、二条東洞  
池上ル 觀音町、倉東入

【出典】藝能史研究會編『日本庶民文化史料集成』第二卷 田樂・猿樂（三一  
書房、一九七四年）第一冊の写真版・第三冊の翻刻文（植木行宣解題校注）

## 資料3 『増補祇園御靈会細記』文化一年（一八一四）

〔京都市歴史資料館蔵〕

船鉢 新町通四条下  
ル町四条町

## 縁起

神功皇后三韓をしたがへ給ひ還御の体をうつす、人形各七日船と同じ、△皇后三韓を征伐し給はんと既に御出船有、対馬国にて御船よりあがり給ひ、御さんの気づかせ給ひし時、白き石にて御腹をひやし御裳の腰に石をはさみて、我孕奉る御子日本の主と成給ふべきならば、今一月胎内を出させ給ふべからずと仰て異国に向ひ、終に打勝、御帰陣ありて筑前宇美の宮にて御安産ありける、今婦人懷妊のとき此尊像の前に腹帶を備へ、祈誓して帶すれば安産するなり、七月十四日ともに舟の尊影に此願をするもの也、

## 古實

此町ハ北四條町南四條町と一町の内にて二組あり、年寄も両方にあり、両町より申合鉢を出す、鉢ハ一つ也、○七日ハ行船なり、十四日ハ帰陣なれば幡有といへども、袋に入納め置よし、又人形の体甲冑なし、古へハ船に帆柱あり、今ハ用ひず、○此鉢いにしへ東洞院御池上ル町にありけるよし、夫故今も船屋町と云、此說甚不審あり、猶可考

人形神功皇后当町人形天明大火に焼失せし也、然共此皇后の御面斗ハ残りしなり、其余ハ何れも新作也、即京都四條人形師齋藤新十郎作也、○面をかけ、かつら、其上に天冠あり、末廣をもたせ、

## 鎧附

衣裳ハ萌黄の狩衣、八ツ藤のさし貫、沓をはく、此御装束ハ去ル堂上方よりの御寄附なり、

儀良 合掌のすがた、赤熊をいただく、衣裳ハ花色地金入の半臂、うこん地精好の大口、うこん地精好の大口、

住吉大明神 矛觸矢、白衣上に萌黄地狩衣、白精好の大口、腰帶折鳥帽子を着す、太刀をはく、

鹿島大明神

立鳥帽子を着し右に長刀、左に唐團、衣裳ハ白衣上ハ茶地の狩

衣腰帶白精好の大口、大刀をはく、

屋根 二重屋根、唐破風銅瓦、

屋形 組天井

屋形水引 金地龍の

もやう、

舳先龍頭前掛

衣裳ハ萌黄の狩衣、八ツ藤のさし貫、沓をはく、此御装束ハ去ル堂上方よりの御寄附なり、

儀良 合掌のすがた、赤熊をいただく、衣裳ハ花

地をり綾錦

水引 狐々緋

二番水引 紺地

火焼口三方に簾子ばかりの障子あり、影物三方にあり、上

下に水引有、上ハ紫縮緬白上りもん、下ハもへざ羅紗、

胴幕 まんまと仕立、紺地緞子

見送 もやう牡丹からくさ、

楫 狐々緋

欄 朱塗ト水引あり、

壓縁 黒塗金めつ

左右高

欄 浅黃地窓巴の織紋、

外 増補

舳先大金幣一本、是ハ文化十年癸酉六月新調、當年より龍頭ハ北四條

町当番の年、金幣ハ南四條町当番の年、何れも隔年に出すなり、

## 大船鉾の飾付等に関する文献

資料1 『〔祇園祭礼〕図』（丹緑筆彩本） 寛永末（～一六二六）刊

〔岐阜市立図書館楠堂文庫蔵〕

（寛永十九年版『俳諧百韵之抄』の裏貼りの「船鉾の場面」「八幡山の場面」のうち）

ふねほこ、このふね定まりて、あとにわたる、  
これにも人ぎやうの左右に人ありて、はやしわたす、

【出典】渡邊彌紀「丹緑本考—新出『〔祇園祭礼〕図』の紹介をかねて、およ

び『暈し』の技法について—」『實踐國文學』第五五号、一九九九年。

資料2 『祇園会細記』宝暦七年（一七五七）刊

〔京都大学付属図書館蔵〕

第一冊「山鉾由来記」

船鉾  
下ル町  
新町四条

神功皇后三韓をしたがへ給ひ還御の体をうつす、人形各七日船と同し、△皇后三韓を征伐し給へんと既に御出船有、対馬国にて御船よりあがり給ひ、御産の氣づかせ給ひしどき、白き石にて御腹をひや

るよし、夫故今も船屋町と云、此説不審有、猶可レ考、

し、御裳の腰に石をはさみて、我孕奉る御子日本の主と成給ふべきならば、今一月胎内を出させ給ふべからずと仰て、異国に向ひ、終に打勝御帰陳ありて、筑前宇美の宮にて御安産ありける、今婦人懷妊のとき此尊像の前に腹帶を備へ祈誓して帶すれハ安産する也七日

十四日ともに舟の尊影に此願をするものなり、

第三冊「山鉾由来記下」

船鉾 新町四条下ル町

餃附

神功皇后 面をかけ、かづら其上に天冠あり、未広をもたせ、上着二やう有、一ト通ハ地黒、又

純子なり、○儀良 合掌のすぐた、半臂ハ黒地

金入竜のもやうさしみき、○住吉 弓欄矢直衣

○鹿島 右に長刀左に唐团をのかり、○屋形 此内に神功皇后衣、○天上幕 屋形の天上に有。赤地

○屋形幕 純錦もやう菊両方に花幔あり、

○金幣 軸さきに 猛々絆桐鳳あり、○大水引 猛々絆桐鳳のぬひ、

○前掛 軸かくしとも云、もへ

絆純子花いろどんす同是びろうど、○下幕 雲彩浪のもやう浅萌黄羅紗五色

○前掛 獅子頭のぬひ、○胴幕三幅

○下幕 黄上りうんさい、○艤屋形 房子いやうじほり物三方、○艤水引

の雲みひ、○梶猩々 純金糸浪に

古実 此町北四条町南四條町二組あり、年寄も両方に有、両町より

申合せ鉾を出す、鉾ハ一つ也、七日ハ行舟也、此船ハ帰陣なれば御幡有といへども袋に入納め置よし、又人形の体甲冑なし、古ヘハ船に帆柱あり、今ハ用ひず、此鉾いにしへ東洞院御池上ル町にありけるよし、夫故今も船屋町と云、

## 大船鉢の飾付に関する文献の記述対照表

	『増補祇園御靈会細記』 (文化11年／1814)	『祇園山鉢書 人』 (文政10年／1827)	若原史明『船鉢之記』(昭和6年／1931)「文化文政年間の裝飾」抜粋
神功皇后	人形は天明の大火で焼失、皇后の面だけ残る。残りはすべて新作で、京都四条人形師齋藤新十郎の作。面、鬘の上に天冠。末廣を持ち、白衣、萌黄の水干、紺袴。	面、鬘の上に天冠。末廣を持ち、白衣、萌黄の水干、紺袴。	「御面は焼失以前のもの、人形は新作にて四條の人形師齋藤新十郎の作。萌黄の狩衣、八つ藤の差貫、沓を召さる。然してこの装束は去る堂上方よりの寄進に係るものなり。」
礎良	合掌、赤熊、花色地に金糸入の織の半臂、うこん地精好の大口。	合掌。黒地に金糸入の織の半臂。龍文様の指貫。	「人形は新作にして合掌。花色地金入の半臂、うこん地精好の大口を着く。」
住吉	弓、矢壺に入れた矢、白衣の上に萌黄地の狩衣、白の精好の大口、腰帶、折鳥帽子をかぶり、太刀をはく。	弓、鞆に入れた矢、直衣は黒の紺。	「人形は新作。白衣に萌黄地狩衣、白精好の大口、侍鳥帽子を冠り、太刀を佩く。」
鹿島	立鳥帽子、右に長刀、左に唐团扇、白衣の上に茶地の狩衣、腰帶、白の精好の大口。大刀をはく。	右に太刀、左に唐团扇、白衣の小袖に紺の狩衣。	「人形は新作。立鳥帽子、右に長刀、左に唐团扇を持つ。白衣に茶地狩衣、白精好の大口、太刀。」
屋根	二重屋根、唐破風、銅瓦。	—	「二重屋根、唐破風、銅瓦葺」
屋形	組天井、柱六本。	—	「組天井、柱六本、浪麒麟の軒彫刻」
屋形幕	金地に龍文様。	紫縮面金地に龍文様。	「(屋形水引) 金地龍模様の織縫」
龍頭	—	月溪下絵の金箔地龍頭。	「金箔置の龍、近年松村月溪の意匠にて作る。」
金幣	文化10年6月新調。この年から龍頭は北四条町当番の年、金幣は南四条町当番の年と隔年交替で出す。	大幣は仙洞御所からの寄付。龍頭と隔年で出す。	「大金幣、真紅の大房付、文化10年6月の新調。文化10年より北組当番の時は龍頭、南組当番の時は大金幣を用ふる事定まり。」
前掛	綾織、正面向きの龍文様。	綾織の龍の図。縁は猩々縫。	「(前掛上) 猩々縫金糸にて窠巴紋縫。」「(前掛) 花色地綾錦織、真向小龍模様、縁猩々縫浅黄房付。」
一番水引	猩々縫無地。	猩々縫、龍の刺繡。地は薄萌黄色。図は唐花の紋。	「猩々縫無地。後に至りて浪に飛龍の縫を施す。」
二番水引	紺地錦。	猩々縫波に飛龍の刺繡。	「紺地錦小雲金入模様。」
胴幕	幔幕仕立、紺地の綾子と猩々縫の切継ぎ。	猩々縫と浅黄綾子の段だら。	「紺地菊唐草模様と猩々縫無地の堅つぎ幔幕仕立て紺糸房付。」
下胴幕	木綿地、白藍上り、波文様。	—	「白晒に藍上り浪模様。」
艤屋形	上下に高欄、中は火焼口(瓦燈口の誤りカ)三方に綾障子と彫刻、上下に水引、上は紫縮縮に白上りの紋、下は萌黄の羅紗。	—	「上下に高欄、中は瓦燈口、三方もじ張障子浪に海馬の彫刻極彩色。」
艤水引	—	—	「(艤屋形続き) 上幕紫ちりめん、窠巴紋、下幕藍天鷺絨羅紗無地、真紅の闇房。」
見送	蝦夷錦。地は藍のびろうど。牡丹唐草文様。	綾青海波に龍の図。縁は猩々縫。	「鳶色牡丹に鳳凰模様の織物、縁猩々縫深紅の房付。」
舵	猩々縫無地。	猩々縫に飛龍波文様の刺繡。	「猩々縫、浪に金糸にて龍模様の織縫、文化新調、黒輪達びの櫛房付。」
吹貫	紅白の縮緬、金箔の玉あり。	頭に銀の玉、五色の絹。	「萌黄ちりめん紅ちりめん白ちりめんの三色。」
幘	猩々縫、金糸で窠の刺繡。	猩々縫、白のクワ綻紋。	「猩々縫、白寄糸にて窠巴紋縫。」
押綱	黒塗、金めっきの金工品。	—	「黒塗、金滅金の金具。」
左右高欄	朱塗。下に浅黄地窠巴織紋の水引あり。	—	「朱塗、浅黄郡内に窠巴紋付の下幕を附す。」
他の情報		文化元年復興。	

### 凡例

- 一、 本表は大船鉢に関する記述がある文献の内、飾付について詳細な情報を記す文献の内容を比較したものである。
- 一、 『増補祇園御靈会細記』(文化11年／1814)、『祇園山鉢書 人』(文政10年／1827)は原文を現代語に改め、要約している。若原史明『船鉢之記』(昭和6年)は、「文化文政年間の装飾」の項からの抜粋を原文通りに記載している。
- 一、 記述がない場合は「—」を記入している。

## 大船鉢を描く絵画リスト

### A. 天明の大火以前の大船鉢を描く絵画リスト

No.	名称	員数	材質技法	制作年代	筆者	所蔵	備考
1	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本金地著色	寛永（1624～44）前半		京都国立博物館	
2	『祇園祭礼図』 （丹緑本）	11枚	丹緑本	寛永末（～1626）		新潟県柏崎市・黒船館、岐阜市立図書館楠堂文庫	
3	『祇園祭礼図屏風』	6曲1隻	紙本著色	明暦年間（1655～58）	海北友雪	八幡山保存会	京都市指定文化財
4	『祇園祭礼絵巻』	2巻	紙本著色	寛文（1661～73）頃		個人	
5	『祇園御本地』	4巻3冊	版本	承応明暦（1652～58）頃		京都大学附属図書館等	
6	『祇園祭礼絵巻』	2巻	紙本著色	元禄（1688～1704）頃	土佐派	永青文庫	
7	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本著色	元禄（1688～1704）頃		個人	
8	『祇園祭礼絵巻』	1巻	紙本著色	元禄（1688～1704）頃		神宮徵古館	
9	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本著色	17世紀後半		細見美術館	
10	『宝永花洛細見図』	15冊	版本	宝永元年（1704）		京都大学附属図書館 (谷村文庫) 等	
11	『祇園祭会図偶』	1冊	版本	正徳6年（1716）		刈谷市中央図書館	
12	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本金地著色	17世紀末から18世紀初頭	加藤遠澤	金沢市立中村記念美術館	
13	『祇園御盡会細記』	3冊	版本	宝暦7年（1757）		京都府総合資料館等	
14	『都祇園会図会』	1冊	版本	宝暦7年（1757）		京都市歴史資料館等	享和版
15	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本金地著色	寛保2年（1742）頃		茨木市・溝杭神社	

### B. 天明の大火以後の大船鉢を描く絵画リスト

No.	名称	員数	材質技法	制作年代	筆者	所蔵	備考
1	『祇園祭礼真図』	2巻	絹本著色	天保5～8年（1834～37）	横山華山	個人	
2	『祇園会御祭礼 山鉢之由来』	1枚	版本	天保7年（1836）	有楽斎長秀	京都府立総合資料館等	
3	『祇園祭礼図屏風』	6曲1双	紙本著色	天保10～安政4年（1839～57）		個人	
4	『祇園祭礼絵巻』	1巻	絹本着色	嘉永元年（1848）	伝冷泉為恭	國學院大學神道資料館	
5	『京都祇園祭礼鉢之 図』	3枚続	大判錦絵	弘化4～嘉永5年（1847～52）	五雲亭貞秀	京都府立総合資料館	
6	『大船鉢図』	1幅	絹本著色	江戸時代・19世紀	豊彦印	四条町大船鉢保存会	
7	『大船鉢図』	1幅	絹本著色	江戸時代・19世紀	岸連山	個人	
8	『増補華洛細見図会 東山之部初編』	1冊	版本	文久4年（1864）		京都府立総合資料館等	
9	『大船鉢図』	1幅	絹本著色	明治元～5年（1868～72）	幸野楳嶺	個人	
10	『大船鉢図』	1幅	絹本著色	明治5年（1872）以後	幸野楳嶺	個人	
11	『大船鉢図』	1枚	紙本淡彩	明治時代・19世紀	村瀬玉田	奈良家記念杉本家保存会	

※復原にあたっては、天明の大火以後の大船鉢を描く絵画リストを参照した。

# 大船鉾を描く絵画図版

『祇園御靈会細記』 部分 船鉾 宝暦 7 年 (1757)

(81 頁の B-13)



大船鉾「祇園祭礼図屏風」（個人蔵）部分

(81 頁の B-3)

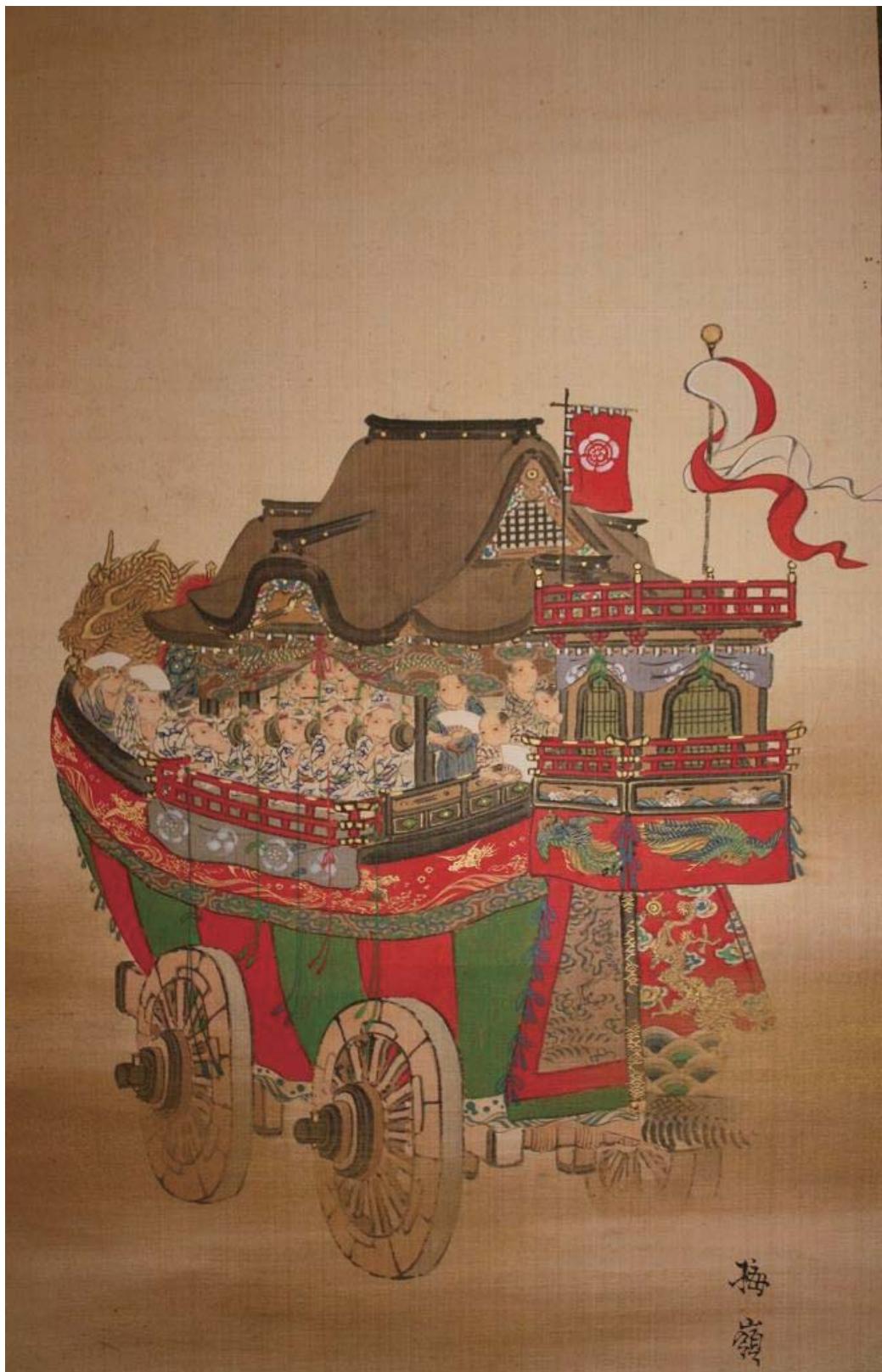


※本図は巻頭図版にも掲載

同図（83頁）の拡大図



幸野模嶺筆「大船鉾図」（「八坂神社・大船鉾図」双幅のうち）（個人蔵）（81 頁の B-9）



幸野模嶺筆「大船鉾図」(個人蔵)

(81 頁の B-10)

